思想問題小言【一】

美濃部達吉

國民思想の動搖、惡化といふことが、世間の問題とせられる。人に依ると、民心日に益險惡に趣き、國民道德は將に墜ちて、國家社會の前途も將に危きに瀕して居るかの如くに唱へられて居る。それは必ずしも全く根據の無い事ではない。世界大戰の影響として、頗る不健全な急激突飛な思想が、民心を動搖し、それが一部の人々の間には可なりに强い勢力を得て、中には過激な反社會、又は非國家的の行動に出でようとする者も有り、之に對して相當の對策を講ずることは、已むを得ない必要であらう。

併しながら、若し國民の思想を以て常に一定不動の状態に在るべきものと爲し、舊時代の日本に發達した道德思想を標準として、それから少しでも變遷すれば、常に社會の不健全を示すものと考へるならば、誤り之よりも甚しきは無い。而して世間の思想の惡化を唱へる者の中には、或は意識して或は無意識に、此の誤りに陷つて居る者が多くないやうに思はれる。成る程、今日の時代思想を以て十年二十年の前に比較すれば、其の變化の極めて著しいことは、疑ひを容れない所で、將來は尚益益變化すべき傾向が有つて居る、けれども一部の不健全な過激思想を除いては、此の變化は社會の文化の發達に應じて當然に起るべき變態であつて、寧ろ社會の健全なる進歩を示す徴候と見るべく、決して之を以て思想の惡化と稱すべきものではない。之を危險視し惡化視するのは、多くは舊時代に發達した道德思想を萬古不易の眞理の如くに考へ、之を以て强ゐて文化の全く異つた段階に在る現代の思想をも律せんとすることから生ずる誤りであつて、國家の政策を此の誤想の上に打ち建てやうとするのは、其れ自身甚だしい危險思想と言はねばならぬ。

現代の國民思想が、舊時代の思想から見て、著しく變化したことは、變化すべき當然の理由が有つて、茲に至つたのである。それは現代の文化が舊時代の文化とは全く異つた基礎の上に立つて居ることから生じたのであつて、就中其の變化の最も重なる原因としては、左の四點を數へることが出來る。

第一には、現代の文化は、封建時代の階級的社會組織に反して、人格の平等を基礎とするものであることと是である。封建時代に於て上下主從の階級別が極めて嚴重であつたのは、それが恰も其時代の文化に適應する所以であつたからである。封建制度が崩れてから後も、數百年の間に養成せられた慣習は、容易に之を脱することが出來ず、其影響は尚今日迄も著しく殘つて居るけれども、是は現代の文化とは其根柢に於て相容れないものであつて、早晩必ず消滅すべき運命に在るものである。現代の文化は、各人が其本質に於ては平等の人格を有するものであることを根本精神と爲すものである。固より人間は其先天的及後天的の能力及境遇に於て極めて不平等であることは、言ふ迄も無いことで此不平等に應じて其地位にも大なる差等を生じ、職業の上に於ても指揮する者と其指揮に服從する者との區別が生ずることは當然であるけれども、是は人間としての本質上の上下の階級別ではなく、唯現在の地位が異る結果に過ぎない人間としては各人平等であつて其の間に上下主從の區別の有るべきものではないとすることが、現代文化の根柢を爲して居る。近時に於ける思想の變遷は第一に此の點に其原因を有する。

第二には、現代の文化は、封建時代に於ける各個人の束縛的の生活に反して、個人的自覺に基く各人の天分の自由なる發展を基礎とするものであること、是である。階級制度の社會は又必然に束縛的生活の社會であつて、封建時代に於ては、各人の生活は精神的及物質的の總ての方面に於て、束縛せられたものであつた。家族制度は極端に重んぜられ、職業は家職の世襲であり、婚姻は家格を保つ爲の婚姻であり、其善行は家の譽であり、其惡行は家名を汚すものとして擯斥せられ、各個人の人格は無視せられて、唯家のみが社會の單位として認められた。現代の文化は、各人の生活を此等の總ての不自然なる束縛から解放して、自由に其天分を發揮することを得しむることを其根本精神と爲すものである、國民思想の變化は此の點に第二の原因を有する。

第三には、現代の文化は、科學の發達及教育の普及の結果として宗教的の迷信から解放せられ又は解放せられつゝあること是である長い間に養成せられた種々の迷信は、一朝にして之を脱することは不可能であるとしても、科學に基礎を置かない宗教的の迷信は、所詮は學問的知識の普及しなかつた舊時代の遺物であつて、漸次に衰滅すべき運命に在ることは、疑ひを容れぬ所である。舊時代に發達した道德思想で宗教的の迷信を基礎として居るものが、其勢力を失ふに至ることは其必然の結果であつて、國民思想の變遷は此點に其第三の原因を有する。

第四には現代の文化は、世界的交通の基礎に立つものであること是である。鎖國時代の日本と異つて、現代の日本は世界の舞臺に濶歩する所の日本であつて、殊に世界大戰の後は、列國との交通は益々密接となつた。此の時代に於て日本の文化のみが世界に通用せぬ特異の思想の上に建てられて居ることの不可能であることは言ふ迄もなく、又決して日本の國際的地位を維持し得る所以ではない。國民思想の變遷は此點に其第四の原因を有する。

此等及び其他の原因は相待つて國民思想の動搖と變化とを來したのであつて、それは敢て憂ふべき所ではなく、又如何なる權力を以てしても防遏し得べき所でもない若し強いて之を抑壓しやうとすれば、それは徒に民心を激發せしむるもので甚だ危險である。

併しながら一方には此の思想の變遷に伴うて、往々極端に馳せ、國家及び社會を危うするやうな思想の行はれて居ることも、疑を容れない所で、爲政者、教育者其他國民を指導すべき地位に在る者は、如何なる思想は不健全なるものとして排斥し、如何なる思想は現代文化の健全なる産物として見るべきかを鑑別することが、極めて必要である。

本稿は敢て新奇なる創見を發表せんとするものでもなく、又敢て深奥なる研究の結果に出でたものでもない。其の大體は既に多くの識者に依つて言ひなされて居る所に過ぎないであらう。唯時事新報記者の求めに依り今日以後數回の紙上を借りて成るべく平易に現代思想を解析し其如何なる程度に日本の國體及國情に調和し得べきかを述べやうとするに過ぎぬ。

資本主義の成熟と社會主義【二】

小泉信三

此學説の立場からすれば社會制度と生產力との兩立不可能の狀態即ち資本主義存續條件が消滅して社會主義制度が之に代る事が必要となり、又その成立條件の具備することが資本主義の最も發達せる英米獨佛に起らずして先づ露西亞に起ると云ふとは普通の觀察を以てしては承認す可からざることで勿論である。而してこれが動かすべからざるマルクスの眞解釋であるとすればボルシエヴイキの革命は準備のないところに起つた結局成功する見込のない革命だと謂はなければならぬ。彼等は固より是に對して答へなければならぬ。ボルシエヴイキの一人カアル ナデエクはその「社會主義の科學より實行への發達」の一節に此問題を論じて居る。彼に從へば、一部のマルクシストの間に行はれて居る、社會主義革命は、資本主義が一國民の全經濟生活を包擁して、全國民を極めて少數の資本家と壓倒的大多數のプロレタリヤとに分岐せしめた場合にのみ可能であるとなすの意見は、マルクシズムの吹聽（Verallhornte auffassung）である勿論斯の如き狀態に到達すればプロレタリヤの仕事は甚だ容易であるだらうけれども、プロレタリヤの着眼は手を拱して其時の到るを待つことを許さない。社會主義は資本主義が社會主義その者の準備を完成するを待つてたゞ準備せられた食卓に就けばいゝと云ふのがハインリヒ、クノウ等の根本思想であるが資本主義から社會主義への變形は決して斯の如く機械的に行はれるものではない。それでは社會主義的革命は何時何處で行はれるかと云ふに、彼れは斯ふ「社會主義革命は資本的組織の比較的微弱な資本主義國に於て先づ起る[illegible]の最も脆弱せる資本主義諸國は、社會主義の突破點であつて此處に社會主義革命が始まる。」而して此處から他の國へ傳播すると又曰く「社會主義革命は何時起るか。「それは資本に依つて造られた狀態が、勞働者に取りて堪へ難きものとなるところでは何れの國に於ても起り得るし、又起るであらう。民衆の苦艱はクノウ一派の統計を一笑に附し、革命の Kra'er デマルクス主義の統計的煩瑣哲學者が、彼等に合圖を與へるのを待つては居ない」と。然し乍ら後に說明する通り「資本に依つて造られた狀態が勞働者に取りて堪へ難くなる」とは、資本主義發達の程度と無關係に起り得るから、即ち資本主義の發達が最高度に達して居る國は、必ずしも勞働者の境遇が「最も堪へ難き」國ではないのであるから、若し右